

「流れる」の比喩表現

水 藤 新 子

キーワード

幸田文 文体的特性 比喩表現 オノマトペ 提喩・換喩

1 はじめに

幸田文（1904～1990）の作品世界は、何よりもその自由闊達な表現に支えられている。周りから請われるままに書いた父の思い出が好評を博し、ふと気づけば「作家」と呼ばれるようになっていたその文章は、作家然とはしていない。「（緊張のあまり）汗がたらたらしていて、それがはっきりわかっているのに、拭けばだめになりそうだった。そこいら中が強張っていた。」（「黒い裾」）のように、オノマトペとくだけた語句とを併用するといった、世間一般の「職業」作家であれば避けて通るような表現が、幾つも見受けられるのだ。

ただ、自ら望んだわけでもないのに鉛筆を握らされた「急造」作家であることを思えば、「作家らしからぬ」表現が頻出しても無理はない。幸田文自身、「思い出屋」と卑下し⁽¹⁾、「私は玄人じゃない」と言い続けたと言う⁽²⁾。「文章を書く」という意識はあっても、手持ちの「書きことば」には限りがある。足りない分は「話しことば」を動員するより他はない。その結果が上記の例だが、ここから感じられるのは書き手としての拙さよりも、場面の生々しさであろう。主人公の緊張が、伝い落ちる汗の心地悪さが、読み手自身のものとして感じられるのである。

こうした表現効果は、「玄人」らしからぬ表現だからこそ生まれるので

はないか。文章意識にとらわれることなく身近なことばで書くからこそ、書き手の感じたままが、読み手にも直截に伝わるように思う。他に言い方を知らなかったがために選んだひとことが、思いがけず的を射ることもあるのではないか。型破りな表現を駆使した、見ようによっては「悪文」すれすれの文章だからこそ、読み手の感覚に直に訴えることが可能になったと言すべきか。

本稿では、幸田文作品のこうした文体的特性を解き明かす作業の一端として、特に比喩表現に焦点を当てる。

2 分析の対象

古来修辞学で示されてきた比喩法の類型（直喩・隱喩・諷喩など）は表現技術としての分類であり、送り手（書き手、表現主体）側に立ったものであった。中村明は、これら個々の性質を検討し、分類上の十全な規準とはなり得ないことを指摘した上で、「比喩表現の分類は、やはり、言語である比喩の表現形式を規準とするほかはない」との前提を立て、その表現形式を認識する受け手（読み手、受容主体）側からの分類を試みた。これが指標比喩・結合比喩・文脈比喩である⁽³⁾。「読者がある言語表現に出あって、それを比喩として受けとるとき、言語表現側のどういう性格がその判断を促すのだろうか」という疑問を出発点とし、比喩の「わかり方」の違いを、言語的なあり方を観点として行ったこの三分類を、今回の分析でも用いることにする。また、各用例の説明においては「喩えられるもの」を〈トピック〉、「喩えるもの」を〈イメージ〉とし、この用語についても中村に倣うものとする⁽⁴⁾。

幸田文の文章は「書きことば」として練れたものではないが、それ故他の作家の作品では目にしないような新鮮な表現も少なくない。自身はそれを「新鮮」とは思わず、あくまで未熟さ、技量不足ととらえ、思い悩んだ末に一時は筆を断つ決心をした⁽⁵⁾。今回採り上げる「流れる」（1956）は、「玄人」意識が持てないままに、それでも「作家」として立つ決意をもっ

て書かれたとされる作品である⁽⁶⁾。こうした意識の変化を考慮するなら、内容面（芸者置屋に女中志願した「素人」梨花が主人公）に限らず表現面においても、この作品は重要な意義を持つ作品と見做せよう。

テキストは、岩波書店刊『幸田文全集』第五巻を用いた。なお引用文の表記については原則として現代仮名遣いとし、常用漢字については新字体に改めた。また、引用文中の振り仮名及び傍点はすべて、幸田文自身によるものである。

3 「流れる」に見られる比喩表現の諸相

この作品に現れた比喩表現は、のべ367例／異なり287例に上った（以下、／を挟んで左はのべ、右は異なりの用例数を表す。特に断りのない場合は、異なりの用例数とする）。

3・1 指標比喩

特定の言語形式、いわゆる指標のある比喩は85例あり、21種類の指標が見受けられた。最も多く用いられているのは「よう」で44例、次いで「みたい」が10例あり、この二種で全用例の六割を占めている。

1 雪の予報が何度もあってそのたびに雪に逃げられ、雪のかわりに刺
のような風が吹いた。

2 髪は流行のあわびみたいな型だ。

これ以外はすべて一、二例に止まるが、次の例は注目に値する。

3 勝代と主人がショールに肩と顔を包み、勝代は一本の木みたような
姿勢、主人はうつむききって続いて行く。

「みたようだ」は近世期に成立した語で「みたいだ」の語源的な形である。口語的であり、また近年は耳にする機会自体なくなりつつある。このような用語が文章に現れるところに、書き手の姿勢、さらには生まれ育った時代や環境までもが窺われる。

4 日向でみる絹糸よりつややかに繊細に、清元の節廻しは梨花の腑に

落ちて行った。

主人が唄う「清元の節廻し」の「つややかさ」「繊細さ」を表すのに、「日向でみる絹糸」が引き合いに出されているが、ここでは比較の助詞「より」が用いられていることに注意したい。

4' 日向でみる絹糸のようにつややかに繊細に、

「節廻し」の見事さは「日向でみる絹糸」と等価ではなく、それ以上だと言うのである。〈イメージ〉をストレートに提示するのではなく、むしろ一ランク下のものを取えて示す、とでも言えようか。この「つややかさ」「繊細さ」を言うには「日向でみる絹糸」でも及ばないという、聞き手＝梨花の価値観が感じ取れるのである。

ところで、「清元の節廻し」を「日向でみる絹糸」と喩えるのには違和感が残る。耳で聞き取る声や口調を、目で見える要素で捉えるせいだ。こうした例をその異例さから結合比喩と見る向きもあろう。だが、読み手が4の例を比喩と認知する際にまず手がかりとなるのは、「より」という言語形式のはずだ。この指標を読み取って後、〈トピック〉と〈イメージ〉との異例な結合に目が行くのである。従って、このように複数の比喩的要素が見受けられるものでも、指標を備えているものについては指標比喩として扱うことを断っておく⁽⁷⁾。

指標比喩は、その言語形式ゆえにともすると比喩性を失い、慣用句的な言い回しとして定着する場合がある。海水浴場の混雑を言うのに「芋を洗うよう」だとか、悲しみのあまり「胸が張り裂けそう」だとか、新聞や文学作品においてもこうした例は珍しくない。

5 新しいワーゲンのおしりは昆虫に似て、

6 天井からは万能干し器が骨ばかりの傘のように吊りさがって、

5はタクシーが走り去る様子を見送っている。フォルクスワーゲンはあのころんとした形に特徴があり、「ビートル（カブトムシ）」の愛称で親しまれていることを思えば、この発想は独創的とは言えまい。

6は家庭で用いる物干し器具だが、そもそも傘をヒントに考案されたも

のだろうから、当たり前の見立てと言えるだろう。

こうした陳腐と言っても差し支えのなさそうな例も見受けられるが、やはり目につくのは次のようなものである。

7 牡丹だとか朴だとかいう大きな花が花卉を閉じたりひらいたりする
ような表情だと思って感嘆してみたのだが、

目見えの晩のうちに、梨花は主人を「重い厚い花卉がひろがってくるような、咲くというまなざしだった」と評している。女性の華やかさを大輪の花に喩えることは珍しくないが、「花卉を閉じたりひらいたりする」という見方は、比喩としてさらに一步踏み込んだ、具体性の高いものと見做せよう。

8 男、男、勝代、三人のスタッカ^マットのような短いやりとりが交わされた。

強請りに来た男と、巡査と、置屋の娘との激しい言い合いを、短く切る音符で表している。この直前、娘が強請りを追い詰める口調を「鈍感な豚を錐で突いて檻へ追いこむ感じだ」としており、やりとりの激していくさまが如実に伝わってくる箇所である。

9 (勝代の) 熱しすぎた頬は満潮の河のように膨らみすぎて、薫しべを聯想させる細い眼はぴかぴかと濡れている。これは美しくない。

十九の娘の、男性を前にして高ぶる表情が「美しくない」という。おそらく紅潮した頬は、夕映えの川面の美しさを〈イメージ〉としてもいいはずだが、ここでは膨張し切った「満潮」と指定されている。潤む瞳は可憐な〈トピック〉でも、「薫しべ」並みの幅では訴えようがない。

肉付きのよい頬は風船や饅頭を連想させる。紅潮していれば、「林檎のような」という慣用表現も当てはまる。それを本来丸みを帯びたものではない「河」に見立てたのは予想外だが、「満潮の」溢れんばかりの水嵩を思い浮かべ、読み手は膝を打つ。目の細さはしばしば糸に喩えられるが、場合によっては美しさを表しもする⁽⁸⁾。同じ細いものを選んだ点で意外性は低いが、「薫しべ」の〈イメージ〉は哀れに貧乏くさい。頬は「膨らみ

すぎ], 目は「細い」さまを, 言い得て余りある残酷さだ.

10 あがって来る裾のあたりが水気を含んでいるんじゃないかと疑われるくらい, からだじゅうにしとっと軽くないけはいがある.

「おちついた奥様」風の美しい芸者である. 立ち居振る舞いの優雅さを, 適度な負荷をかけたためかと見ているのがおもしろい. それも「水気」だからよいのだ. 裾に忍ばせているのが石やおもりであったら, 滑らかさとはほど遠い動きとなってしまう.

続く「しとっと軽くないけはい」だが, 「しとっ」は既存のオノマトペ「しっとり」から連想された, 一種の変形語と思われる. 前述の「水気」から, また, 女らしさはしばしば「しっとりした」と表現されることを受けて, 現れた語であろう. さらに, 「軽くない」と打ち消す形を用いている点も注意を要する. 身のこなしから感じるのはたおやかさであって, 鈍重さではない. 抽象的な「けはい」が「軽くない」と見るのは, 次項で述べる結合比喩の発想だ. 前文の指標比喩と相俟って, 女らしいゆるやかな物腰を, 実に触感的に切り取っている表現である.

3・2 結合比喩

いわゆる比喩指標のないものが282例/202例あり, うち102例が結合比喩であった.

まず目につくのは, 人間以外のものを人間めかす擬人法である.

11 釘の穴が黒いしみになって整列している.

12 猫はぎゃぎゃと一トきわけたたましく, 一方はどこかへ墜落し, 一方は力足を踏んでごぼごぼと凱旋して行った.

ただ「並ぶ」とせずに「整列」と言い, 「行く」にとどめず「凱旋」と書く. 11は無生物を, 12は生物を〈トピック〉としており, おもしろい見立てではある.

13 生ぬるくうすら冷たくしょう性のぬけた粥を, 出す人は羞しげもなく, 出される粥のほうが病人に恐縮しているのである.

暮れに風邪をこじらせ、従姉の家に転がり込んだ梨花は、そこで冷たい扱ひを受ける。「ふかしごはんの残ったびしょびしょへ水をおちこんでトふきさせれば、こういうまずさになる」粥を出され、その「あたじけない味」、見てわかる「米粒の荒れ」を、粥の「恐縮」と受け取った。11と同じく無生物を〈トピック〉としていても、この例になると読み手ははっとするだろう。

14 しかし寒い夜だった。病人がおちつくと、しんしんとした凍^{いて}が壁から肩を背なかを縛ってきた。

冷え込みの厳しさを「縛ってきた」と言われると、冬の夜寒が人の形をしたものに思われてくる。「しばれる」という方言からの連想も考えられるが、「肩を背なかを」と具体的な身体部位を書き込むことで、まさに身動きの取れないような冷えが、読み手自身のものとして感じ取られるのではないだろうか。

15 雪の予報が何度もあってそのたびに雪に逃げられ、

16 汁粉をたべさせられても、鳶次の忠告は利いていたから、梨花の舌は用心深い。

15は天気予報が外れた結果を言い、16は、余計なことは言うまいと口をつぐんでいる様子である。「雪」は気象であり、「舌」は人体の一部だが、それぞれ独立した意志を持つかのように扱っている。「逃げる」も「用心深い」も、人間に限らず動物一般について広く用いられるので、どちらの例もいわゆる擬人法とは一線を画す。また、

17 (勝代は) 電柱とあだなされる上背の高さが胸を反らせて威丈高だが、惜しいことにひどい近眼だから眼が利かない。

のような、人間を人間以外のものめかす擬物法の例も見受けられる。

18 「え？ お勝手口？ いいのよ、そこからでいいからおはいんなさいな。」同じその声が糖衣を脱いだ地声になっていた。

玄関を開けた瞬間掛けられたよそ行き声が、女中志願者とわかるなり、がらっと変わった。「声」が「衣を脱いだ」と捉えるのは擬人法だが、そ

の衣は錠剤の「糖衣」である。女らしい声の甘さから、薬を嚥下しやすくするための上掛けを連想し、それを「脱いだ」とすることで、本来の「衣」の意味がよみがえる。慣用的な語彙が、思わぬ形で比喻性を取り戻す例である。このように、〈トピック〉と〈イメージ〉との結びつき方そのものが、読み手に刺激を与える表現は数多い。

19 車の混雑である。ライトが綾を織る。

折からのみぞれで、停まっている車と徐行する車が道幅一杯になっている。闇の中をヘッドライトが交差している。光の伸びるさまは糸を思わせ、「縫うように」と形容されることがあるが、ここでは織物の縦糸と横糸とが絡み合うさまを持ってきた。光ではなくて外来語の「ライト」を、「綾を織る」という、どことなく古風な言い回しで受けた落差もおもしろい。無生物の「ライト」が「織る」と見るのは擬人法でもある。

20 もう寒くはない。というより、汗が出ている。こめかみからつうと流れると、風がそこへ筋になって浸みる。

みぞれの中を、送迎のタクシーを頼みに往復しているうちに、すっかり汗だくになってしまった。汗が伝い落ちる肌に、寒風が吹きつける。濡れたところがひやっとする感覚は、余計な熱が発散される爽快さからは程遠い。風は「筋になって」吹きつけるわけではないが、汗の流れた肌はそこだけが鋭敏になって、冷たさの「浸みる」口となってしまう。身体の中からは熱が立ち上り、とめどもなく汗が溢れ出すのに、それを拭う間もなく冷やされる心地悪さが伝わってくる。

21 つま^り家^事雑^用が珍^{しい}響^で聞^{えて}、すこ^し気^楽な^{もの}がこ^{ちら}の堅^{くな}った^{しろ}と臭^さへ緩^く浸^{みて}きた。

「しろとさんね？」と聞かれ、断られるかと思ったところへ、「つまり家事雑用はどこでもおんなじなもの」構わない、と言われた場面である。「しろと臭さ」が「堅くなった」というのは擬人法のようにもあるが、そこへ「気楽なもの」が「浸みてきた」と続くと、少し違った感じがする。むしろ、乾いた土壌と水気との関係だろう。思いがけない一言が緊張を解

くさまをオーソドックスな連想から描いているが、道具立ての新鮮さで読ませている。

同じ「浸みる」という〈イメージ〉で描かれていても、20が風の冷たさという具体的なものであるのに対し、21は安堵感という抽象的なものを採り上げており、〈トピック〉のレベルには大きな差がある。

22 いまちらと覗いた勝代のあの冷たいようすにくらべれば、なんとやわ普請な自分の気もちなのかとおもう。

21と同じく抽象的な〈トピック〉「気もち」を、建築物の〈イメージ〉に置き換えることで、もろさの度合いにも具体性が備わる。「安普請」と言っても「やわ普請」は聞いたことがない。そもそも「やわ」は口頭語で、文章ではあまり見かけない。ただ、精神面の弱さを「やわ」と言うことはあるので、その連想が働いての造語と見做すべきだろう。

23 いまは少ししなびて薄よごれのマイナス令嬢になっているというのではおもしろくない。

戦後の一時期、没落した家の娘が芸者を志したという。しかし「令嬢の精彩を失わずにいる」ケースは稀で、零落とともにらしさが薄れてしまうのが常らしい。「しなびて薄よごれ」とことばを重ねているが、「マイナス」にはかなわない。「令嬢」が与えるプラスの印象は、「マイナス」を冠せられることで思い出される。他の接頭語でもよさそうなものだが、「元」令嬢では落ちぶれたさままでは言い得ないし、「非」令嬢では判じ物のようだ。「マイナス」と「令嬢」とは、どう見ても縁がなさそうだが、ここでは妙な説得力で結びついている。数直線上の方向が連想されて、ゼロよりも低く落ちてゆく映像が浮かんでくるせいだろうか。

24 この場になってはじめて心のめどの立て場を失ったことがわかって狼狽したのだろう。

「めど」は目当てや目的といった意味で、「めどがつく」「めどをつける」の言い回しは普通に用いられる。ここでは「立てる」と共起しているが、これは計画や見通しに用いられるものと同じで、この語自体に比喩性

はない。ところが「立て場を失った」と続くせいで、具体的な空間が意識される。〈トピック〉と〈イメージ〉との切れ目がはっきりしないが、慣用的な言い回しが比喩性を取り戻した一例と言えよう。

3・3 文脈比喩

比喩の目印となるような一定の語がなく、かといって結合比喩のような異例な結びつきをしているわけでもない。にも拘わらず、読み手に比喩と認められる表現がある。描かれている内容が、眼前の表現と直接的には結びつかない場合に成り立つのが文脈比喩であり、78例あった。

25 なな子は今夜は酔っていないから大いに助太刀をする。

26 倒れる拍子に案外な杖を掴むことはあり得ると思う。

25は慣用句をそのまま用いた例だが、26の「杖を掴む」はどうか。

梨花の主人の置屋稼業は立ち行かなくなるが、知人の口利きで抵当流れの物件を手に入れる見通しが立ち、旅館を始めたいと言う。思いがけず得た幸運を評したものだが、「転ばぬ前の杖」を想起させる。既成の言い回しがベースになっているものの、解体して再構成することで、一旦固まってしまった〈イメージ〉を再生させたと考えられる。

27 今つけられた名までもう知っている。あっけにとられるような速さである。これは用心しなくてはいけない、スピードの目盛が一桁高いという恐れをもたされる速さである。

情報の伝わる速さは、しばしば比喩の対象となる。この場合は、ものの値段を云々する際によく用いる「一桁高い」を計器の「目盛」にかぶせたことで、不可視な種類の「スピード」が、はっきりと目に見えるものと化した。その結果、芸者の早耳は、より恐るべきものとして印象づけられるのだ。

28 道外れの愛情と嫉妬のなかに挟まれることはいやだと思って、梨花はきちんとした線でたてきっている。

美しく芸もある母と、不器量で身を立てられない娘との間には、複雑な

愛憎がある。常に二人のそばに仕える身としては、下手に立ち入らない方が無難だ。実際に線引きするわけではないが、ここでも視覚的な〈イメージ〉を借りてくることで、深入りすまいとの心構えがくつきりと描き出されている。

29 想像という大きなテレビジョンがどこの家にも備えられて、めいめいの送りだした選手が伊達ややつしに扮装して技を演じているのを、気づかいながら想っている。

土地の芸妓総出で、劇場を借りて催す大がかりな舞踊の興行である。どこの家からも、踊りか唄か、それでなければ三味線や鳴り物で参加する。よその土地に負けない芸を磨くのが目的のはずなのに、いつの間にか演者同士の競り合いの様相を呈している。しろうとでよそ者の梨花の目には奇異なものと映り、あまりの真剣さや意気込みはスポーツの競技会を連想させ、「選手」への置き換えが行われたのだろう。

30 一方は五万が五千であっても札さえ見れば長年の乾きが干りついて、どうでもとらずにはいられないという激しさになる。

ここで言う「乾き」は、貧しさを指している。「貧すれば鈍する」と言うが、この強請りも目先の札束にとらわれて、本来望んでいた金額を手にすることはできない。習い性となった貧しさが「干りついて」、もらえる金なら何でも欲しいというさもしさだ。

強い願望の〈イメージ〉としては、「乾き」や飢えがしばしば用いられるが、次のような表現だったなら、印象はどのように変わるだろう。

30' 一方は五万が五千であっても札さえ見れば欲しいという思いが、長年の乾きのように干りついて、

30'' 一方は五万が五千であっても札さえ見れば、長年の貧乏暮らしが乾き切った喉に干りついて、

30' は指標比喩、30'' は結合比喩に書き換えてみた。前者のオーソドックスさに較べれば、後者の活喩はかなり斬新に映るだろう。しかし、常に貧しさに生き、乏しさを意識してきた者にとっては、貧乏の語は敢えて口

に出すまでもない。「乾きが干り^ひついて」とだけ書かれた30からは、金銭への執着が生理的な欲求と化してしまったような、切羽詰まった印象を受ける。

ここまでは、一文中に現れた語句や、ひとまとまりの表現から成るものを拾ってきたが、いかにも文脈比喻らしい、文単位で構成される表現には次のようなものがある。

31 梨花は蔦次が社長夫人として、継母として十分にやっけて行けるとおもい、そしてこれで一人出て行って減るのだとおもう。いちばん堅いまんなかの敷石がもろに脱ける。

長患いをしていた旦那の正妻が危篤となり、後添えに納まる日が訪れたという話である。しっかり者の蔦次が去って行けば、傾きかけたこの家はどうなるのか。「屋台骨」ということばがあるが、「いちばん堅いまんなかの敷石」のニュアンスもそれに近い。「もろに」という口頭語も、打撃の大きさを物語っている。

32 バトンの受けわたしは死を中にして行われる。

同じ蔦次の話だが、正妻から「奥さま」の座を受け継ぐことを言っている。「バトン」は引き継ぎの場面でしばしば用いられる〈イメージ〉であり、今となっては慣用的な印象を受ける。ただ蔦次は、常に正妻を立て、誠意をもって尽くし、娘息子や正妻本人にも認められたと言うから、この円満な引き継ぎは「バトン」同様、息の合った「受けわたし」をされて然るべきものなのだろう。

33 おそらく警察の空気を肺のなかへ吸いこむのも今がはじめてではないだろうし、そういう友だちももっているかもしれないし、自分でもこうした場合は予算のなかに入れて考えていたろう。

強請りに悩まされた主人は警察に来てもらったが、自分たち母娘まで連行されてしまった。本人が年齢を偽っていたとは言え、未成年者に客を取らせた責任を問われてのことだが、法律に暗い上、まさか自分たちまで引っ張られるとは思ってもよらなかつただけに、一方ならぬ心細さだろうが、

その点強請りの方はしぶとそうだと梨花は推測する。

普通の生活をしている限り足を踏み入れることのない、警察という特殊な場所でも、この男は変に慌てたりしそうにない。場慣れしていそうに見える。「警察の空気」は雰囲気の言い換えで、さして非凡な表現ではない。ところが、それを「肺のなかへ吸いこむ」となると話は変わってくる。その場所を知っているだけではない、そこで呼吸したことがあるという言い回しは、拘引経験の生々しさだけでなく、経験から来る一種ゆとりのようなものまで感じさせるのだ。

34 鋸山と勝代と警察署の三本足では勝代の足がいちばん短くて細い。

そうすれば他の二本の強い足に多少の長短があってもなくても、圧力のかかって来るのはいちばん短い細いものにきまっている。

33に続く箇所では、「鋸山」は強請りのあだ名である。この男は前述の通り経験を感じさせるし、警察は国家権力だ。当然、世間知らずな勝代が負けるに決まっている。「足」は人体の一部だが、「警察署」の足は擬人化であり、それぞれ一本とすれば擬物化を感じさせ、合わせて「三本足」と見るならばテーブルか椅子のそれを思わせる。書いていくうちに、次から次へと連想が働き複雑化した表現であり、文脈比喩の発想のメカニズムが窺われる好例と見做せよう。

3・4 比喩表現とオノマトペとの併用

幸田文の文章には、オノマトペ（擬音語・擬態語）が頻出する。形態の面でも共起の面でも、個性を感じさせる例が数多く見受けられるが⁽⁹⁾、比喩表現と併用されている例も少なくない。

35 ぽっぽと湯気の立ちそうな景気のいい話であった。

26で触れた、思いがけず主人の得た幸運を評している。「湯気の立ちそうな」も「景気のいい話」も慣用的な言い回しだが、そこへ「ぽっぽ」という一語が加わったことで表現が生きてくる。立つ湯気が見えるというか、型にはまった表現の組み合わせが息を吹き返す感じだ。

こうした例は指標・結合・文脈の別を問わず現れ、50例に上った。内訳は、10例・28例・12例である。

36 主人は辛そうに聴いている。たぶん頸筋から膏葉でも剥がされるような、ひりひりした心細さなのだろう。

35と同じ、指標比喻の例を挙げる。居候の姪が働きに出て家族が一人減るのだが、その「心細さ」を「頸筋から膏葉でも剥がされるような」とは意外だ。剥がされる瞬間感じる「ひりひり」は痛みをも伴うものであり、皮膚感覚に訴える表現となっている。

37 つまり家事雑用が会釈もなくどさどさとかぶせられてきた。

女中としての採用が決まるなり、息次ぐ間もなく仕事を言いつけられる。しろうとの世界のような、新しい女中への気遣いなどない。「かぶせられる」を用いた結合比喻は慣用的ではあるが、「どさどさ」を見れば仕事の多さ、その遠慮のなさは手に取るようにわかる。

38 花筈が眼につく。鳥田はむろん鬘だが、筈は一見セルロイドでなく本甲で、とろっと油のように重い黄色が鬘をひきたてている。

鼈甲と合成樹脂とでは、まるで較べものにならないと聞く。軽さ、丈夫さ、そして色合いも段違いらしい。「油のよう」な「黄色」は想像に難くないが、その「とろっ」とした質感を思い合わせて「重い」とことわったところが感覚の鋭さであり、非凡さでもある。

39 雪丸にはいって来られると、浮いてる座敷がびしゃびしゃと潰れちまうんだから憎らしいよと云うが、

しっとりした美しい芸者だが、仲間受けはよくない。「陰気」で「お高くとまっている」のだそうだ。「座敷」が「浮いてる」も「潰れちまう」も花柳界では決まった言い方かもしれないが、場の雰囲気が出てきめに沈み込むさまを、「容赦なく」「的確に」の意の⁽⁹⁾「びしゃびしゃ」で示すとは、言い得て妙だ。それほどの力を持った芸妓かと、梨花はますます興味をそそられる。

40 猫のおかげで蔦次の昂奮はかたりと幕になって、タクシーは案外明

るく、「お大事に」とみんなに送られて出て行った。

「奥さま」の座を目前にして、しろうとの世界が怖いと吐露する鳶次に、仲間の芸妓たちの思いも千々に乱される。が、相手にしてもらえないことに怒った猫の粗相で、あっさり散会となった。「幕」は慣用的に用いられるが、「昂奮」と共起するほど熟してはいないし、「かたり」という音からは実際の舞台が想起される。芝居じみた愁嘆場から連想した、文脈比喩との解釈も可能だろう。

いかにも文脈比喩らしいものとして、以下の二例を挙げておく。

41 玄関の沸騰はしゅうんとなる。そして一度激して行った。

強請りと勝代との言い合いは、警察の介入で一旦鎮まるものの、すぐに激しさを取り戻す。「しゅうん」は、やかんの火を止めた瞬間の「沸騰」の収まる音であり、激した場の熱気までが伝わるようだ。

42 かわいそうに染香は買わされそうだ。いよいよ頸が締ってぶらんぶらんにつる^{つる}吊さがるだろうけれど、どうするか。

初老にさしかかり、お座敷のかからなくなってきた芸者でも、新年に備えて新しい着物が欲しい気持ちに変わりはない。呉服屋と結託した主人に乗せられてしまいそうな染香を、梨花は心配する。ただでさえ借金で回らない「頸」が、今度こそ「締って」しまいそうだ。「ぶらんぶらんにつる^{つる}吊さがる」は、縛り首のような状態からの連想だろうが、この先の取り立ての厳しさを物語り、暗鬱な気分させられる表現だ。

3・5 提喩・換喩

43 旦那が糸へんの福井の人なので、景気よかった一ト盛りには、主人はねだらずとも、二度と同じ着物を着なかったというくらい奢っていたらしい。

紡績業、織維業を俗に「糸へん」と呼ぶ。糸偏のつく文字は数ある中で、特定の産業を指しての替え名だが、こうした“類”と“種”，上位概念と下位概念との「関係性」に着目して生まれる比喩を、提喩と言う。

44 死ぬまで何のために繋がっていたいのちなのだろう。

ここでの「いのち」は、置屋で飼っていた犬を指す。子犬のかわいさで手を出したものの世話を見切れず、玄関に繋いだまま、文字通りの飼い殺しにされた哀れな犬だ。「いのち」という上位概念で、犬という下位概念を代弁した例である。

45 色彩^{いろどり}がひきさがって、代りに男衆がはいつて来、手拭を三本おへぎからつるっと器用に式台へ置いて行く。

お披露目に連れて来られた芸妓の、華やかな装いを指す。「色彩」自体は何にでも当てはまるが、ここでは晴れ着に焦点が当てられた。

46 撥に自信があつて、改めての稽古はせずとも済ませられるが、

「撥」は太鼓にも用いるが、ここでは三味線に限定されている。ただ、この「撥」は「(三味線の)腕前」と置き換えることも不可能ではない。この二つは上位／下位と言うよりは、「剣」が武力を象徴するのに似た関係にあり、その意味で換喩と見てもよいかもしれない。

よりわかりやすい換喩の例として、次のようなものがある。

47 奥では主人と赤い羽織黒い羽織がしらじらとしていた。

「羽織」が「しらじらと」した表情を浮かべているわけではない。「主体」である人物を、その「所有物」で置き換えたのである。この他にも「色紋附」「オーバー」「ダイヤモンド」などが登場する。

48 豆腐屋が追っかけ追っかけ幾人も通つて行く。納豆も行く、卵も呼んで行く。が、小路はまだ醒めていないらしい。

「納豆」も「卵」も「売り物」への置き換えであり、「小路」と言えばその住人が潜在的に感じられる点で、こちらは46に通じるだろう。

49 「ここのおねえさん一人ならあんなにひどい稼ぎもさせなかったし、こんな結果にもならなかったろうに、あの鬼子母神がよくないからよ」

50 なんどりはすうっと蒲団のあいだへ手を入れると、二ツ折りの古風な懐中鏡をひらいてほつれ毛を撫でつける。

49は住いの近所の神社の祭神から、50は古めかしい口癖から、それぞれついたあだ名で、地名からついた34の「鋸山」も同類である。49については、「終生解脱しっこない鬼子母神的性格」との陰口も叩かれており、類似から成る比喩と相俟って、さらなる表現効果が生まれている。

提喩・換喩を厳密に判別することは難しい。今回は、併せて52例／22例が得られた。

4 まとめ

比喩の醍醐味は、〈トピック〉と〈イメージ〉とが思いがけない方向から接近する点にある。「流れる」も例外ではないが、こうした意外性のみが、この作品の比喩を支えているわけではない。実際には、慣用的に用いられて既に比喩性を失っている、或いは失いつつある語句を下敷きとした表現がかなりの数に上る。

ともすれば陳腐な語句も、置かれる場所次第で印象が変わる。「糖衣を脱いだ地声」や「バトンの受けわたしは死を中にして行われる」などを見れば、一目瞭然だろう。「頸が締ってぶらんぶらんに吊^{つる}さがる」のようなオノマトペの併用も効果的だ。このように、よく見るとありふれた言い回しが多いのに、前後の語句との組み合わせが異例なために、読む側は全体として新鮮な印象を受けるのだろう。

ここで注意すべきは、むしろ「ありふれた言い回し」の多さである。下敷きにするにはそれだけの内容理解が必要だし、組み合わせる語句を選ぶには、それなりの語感に基づく取捨選択が要求される。「玄人」意識が持てなかったと言うが、潜在的な語彙数はかなり豊かであったことが窺われよう。

見聞きしたまま、感じたままを描こうとすると、出来合いの表現では伝え切れない。少しでも核心に近付こうとして持てる語彙を総動員した結果が、異例な共起を引き起こす。通り一遍の表現に飽き足らず、さまざまに技巧を凝らすのは作家の常だが、幸田文の場合はかくも事情が異なる。読

み手を驚かせよう、唸らせようとする駆け引きではなく、伝えようとする誠実さゆえ、表現は時として破格にもなり得るのである。

冒頭、幸田文の表現からは「場面の生々しさ」を感じるとし、その要因を「『悪文』すれすれの文章」に求めた。「流れる」の比喻表現も多彩さをきわめ、読み手の感覚に訴えてくることを確かめたが、それは素人の強さで片付けられるものではない。対象を見据える鋭い眼、豊かな語彙、確かな語感が揃って初めて可能となる表現なのだ。その力は、時として「死にかけた」ことば——慣用句をも生き返らせる。このような表現の「活性化」について、今後ともさまざまな角度から文体論的アプローチを進め、考察を加えてゆきたい。

注

- (1) 「英訳『黒い裾』に添えて」全集第六巻 186頁参照
- (2) 全集月報8 青木玉による談話「おぼえていること(一)」参照
- (3) 参考文献4 「第2部 比喻表現の分類」参照
- (4) 参考文献5 4～5頁参照
- (5) 「私は筆を断つ」(『夕刊毎日新聞』1950年4月7日付に掲載された談話) 全集第二十二巻 11～13頁参照
- (6) 参考文献8 87～110頁「幸田文——人と作品」(青木玉・高井有一・小島千加子の鼎談) 参照
- (7) 参考文献4 176頁参照
- (8) 「男の目には糸を張れ、女^{おなご}の目には鈴を張れ：男の目はきりりとまっすぐなのがよく、女の目はぱっちり大きいのがよい。*譬喩尽一四」(『日本国語大辞典』「目」の項参照、下線筆者)
- (9) 拙稿「幸田文のオノマトペ——初期作品を対象として——」(『早稲田大学文学研究科紀要』42-III 1997, 221～232頁) 参照
- (10) 参考文献3 284～285頁参照

参考文献

- 1 市川 孝 「幸田文の文体」(講座現代語5) 明治書院 1963
- 2 小島孝三郎『現代文学とオノマトペ』桜楓社 1972

- 3 天沼 寧編『擬音語・擬態語辞典』東京堂 1974
- 4 中村 明 『比喩表現の理論と分類』秀英出版 1977
- 5 〃 『比喩表現辞典』角川書店 1977 (1995改訂新版)
- 6 佐藤信夫 『レトリック感覚』講談社 1978
- 7 中村 明 『日本語レトリックの体系——文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店 1991
- 8 青木 玉 『祖父のこと 母のこと』小沢書店 1997